中原中也

◎特別寄稿
「我家のダダさん」富永一矢

◎企画展
秋の悲歎・富永太郎――私は私自身を救助しよう。

◎特別寄稿
「中原中也という経営」山岡頼弘

「中原中也を肉筆で読む」
――山口大学人文学部・2001年度夏期集中講義レポートより

「中也と心平の青春交友」長谷川由美

◎特別展
書簡にみる交流の足跡

◎小企画展
山口の歌人・友廣保一

◎新資料
高田博厚制作「古在由直ブロンズ像」

平成13年度行事記録
第7回中原中也賞　受賞作品
平成14年度行事予定

Chuya Nakahara Memorial Museum

中原中也記念館
館報2002

7

Public relations magazine
第7号

特別寄稿◉ *Special contribution* | 1 ◉

我家のダダさん

富永一矢

text=Kazuya Tominaga

僕は一九三五年生まれですから、富永太郎は勿論のこと中原中也ともすれ違いでお目にかかることはありませんでしたが、家の中に残されている逸話は子供の頃からよく耳にしたものです。

また長いこと劇場で働いておりましたので、思いがけない出来事にぶつかることもよくありました。

なかでも特に思い出深い事柄が幾つかあります。

あれは一九七六年のことでした。もうかれこれ二六年も前の事になりますが、当時僕は東京千石にあります三百人劇場に勤務しておりました。ある日のこと、小さな映画プロダクションが老婆の踊り姿を撮影するために舞台をお使いになりました。支配人として挨拶に伺いそのお顔を拝見しておもわず息を飲んでしまいました。写真でしかお目にかかったことがありませんでしたが、まさに長谷川泰子さんがそこにいらしたのです。太郎の甥ですと申し上げると、「太郎さんの甥御さん。じゃあ、ジーちゃんの息子さんね。」と僕の顔をじっとごらんになった眼がとても印象的でした。中也に秀雄。太郎に忠三郎。そして泰子。殺風景な楽屋になんとも不思議な空気がたちこめました。

晩年自らの半生を語る 長谷川泰子～「眠れ蜜」より～
（藤田三男編集事務所提供）

残念ながらとうとう僕はこの映画を観る機会に恵まれませんでしたが、シネマ・ネサンス制作、岩佐寿弥監督、佐々木幹郎脚本「眠れ蜜」という作品でした。

僕はその後、六本木の俳優座劇場に移りましたが、あれは九五年頃のことでした。古くからの友人が鐘下辰男の新作を観たかと、いささか興奮した声で電話をしてきました。とにかく中原、小林、長谷川、大岡、富永太郎、それにお前の親爺次郎も出てくる芝居だ。とても良い作品だ。俳優座劇場で上演しない手はないぞ。と彼は云うのです。その内、劇場の若いスタッフ達も観てきてぜひやりましょうと言い出しました。自分の父親が書いたとか、俳優として出演しているというのではなく、作中の人物として登場してくるのは、血縁者としてはいささかつらいものがあり、躊躇しているうちにも計画はどんどん進んでゆき、ついには上演するはめにおちいってしまいました。それが「汚れつちまつた悲しみに…Nへの手紙」です。

鐘下君に、僕は次郎の息子だよ。と申しましたら、彼は、へえー、俺は歴史上の人物を書いたつもりなのに、その息子がこんな近くに居るのか、と言っておりました。

次郎を演じる俳優さんのところへ葡萄酒を持って挨拶に行き、どうぞよろしくお願いしますと神妙に頭を下げました。上演中は気になって気になってとうとう千秋楽まで毎回客席の隅から若い父親の姿を観ておりました。

公演「汚れつちまつた悲しみに…Nへの手紙」
平成7年8月　俳優座劇場
（新潮日本文学アルバム『大岡昇平』より）

我家には、昔から家族が好んで食べる肉料理があります。牛肉の薄切りと、みじん切りにしたセロリとを良く混ぜ合わせソースに漬けておき、熱したフライパンでさっと炒めるのです。これを親たちはダダさんと言いました。

母が今晩はダダさんよ、というと僕たちは驚喜したものでした。なぜこの料理をダダさんと言うのか不思議に思っておりましたが、ダダさんという詩人が家に来られたとき、お前のお婆さんがこれを作ってさしあげたところ、とても気に入ってくださり、それ以来その方のお名前を頂いたのだといいます。

ダダさん、その人が中原中也であることを僕はずっと後になって知りました。

富永一矢氏

一九三五年生まれ。中也と親交のあった富永太郎の弟次郎氏のご子息。三百人劇場に勤務後、俳優座劇場の支配人を務める。

【企画展】

秋の悲歎・富永太郎
――私は私自身を救助しよう。

平成13年10月31日（水）から11月25日（日）まで開催された企画展は、後年中也が「詩的履歴書」に記した最初の友人富永太郎の人間像を紹介すると共に、富永が中也に与えた文学的影響も併せて紹介しました。監修は宇佐美斉氏（京都大学教授）と佐々木幹郎氏（詩人・『新編中原中也全集』編集委員）にお願いいたしました。

初日には、富永太郎のご遺族・富永一矢氏、太郎の友人で京都時代の中也とも親交のあった正岡忠三郎のご遺族・正岡明氏、中原家ご遺族・中原美枝子氏を招き、監修の宇佐美氏、佐内正治市長、福田百合子館長とともに六人のテープカットによるオープニングセレモニーを開催いたしました。富永、正岡、中也のご遺族が山口で揃われたのは初めてのことでした。

テープカット
右より宇佐美斉氏、中原美枝子氏、正岡明氏、富永一矢氏、
佐内正治市長、福田百合子館長

第二高等学校時代の富永太郎

富永太郎は明治34年5月4日、東京市本郷区（現・文京区）に父謙治と母園子の長男として生まれました。大正8年9月に入学した、仙台の第二高等学校（現・東北大学）在学中から文学に親しみ、フランス語を学び、油絵の制作を始めました。富永が描いた油彩やデッサンなど、「自画像」を含めた数十点の作品が現存しています。大正10年からは詩も書き始めます。

大正12年11月19日頃、以前から計画をしていた上海に永住するつもりで神戸港を出発した富永でしたが、翌年2月、自活する見込みがなく帰国。大正13年7月初旬、友人正岡忠三郎の下宿に寄宿していた富永は、友人冨倉徳次郎と正岡を通じて、立命館中学四年生の中也と出会います。富永を知った中也は、富永が住んでいた下宿近くに引っ越します。富永は中也の下宿に訪れては、連日文学について語り合い、彼らの交友は頻繁になっていきました。

富永が、この頃使用していたと思われる手帖「詩帖1」には、ランボー「酔っぱらった船」Bateau ivre原詩の転記があります。これと対応するように中也も、同時期に使用していた「ノート1924」に上田敏訳「酔ひどれ船（未定稿）」が筆写されています。フランス語の学習を本格的に始めていなかった中也は、富永を通してフランス象徴派詩人の作品に触れ、それまで書いていたダダイズムの詩から脱出するきっかけを見つけました。後年中也は、富永について「彼より仏国詩人等の存在を学ぶ」（『詩的履歴書』）と記しています。

大正13年10月11日に最初の喀血をした富永は医師の診察を受けるため、同年12月に帰京。中也は翌年3月末、病気療養のため神奈川県片瀬に転地した富永の後を追うかのように、京都で同棲をしていた長谷川泰子を伴い上京します。

最初の喀血をし不安な日々の中、富永は代表作となる散文詩「秋の悲歎」を書き上げます。この作品は「私は私自身を救助しよう。」という、死の意識に直面した富永が青春を救い出そうとしているかのような一文で結んでいます。その後、富永の病状は一進一退を繰り返し、大正14年11月12日、二十四歳の生涯を終えました。翌日の夕方、富永の死を電報で知った中也は、青い顔をして弔問しています。富永の看病をしていた正岡は、富永の遺髪を切り取り、形見のように生涯大切に保管していました。

中也は、富永の死顔の写真を郷里にいる母フクに「詩人の死顔です」と付記し送っています。中也が山口に帰省した時には、写真を弟たちに見せ「これは偉い人だったんだよ」と何度も繰り返し話したと言います。

中也が郷里の母宛に送った富永太郎の臨終写真　中原美枝子氏蔵

特別寄稿◉ Special contribution | 2 ◉

中原中也という経営

text=Yoshihiro Yamaoka

山岡頼弘

Chuya Nakahara

中原中也には三百首近い短歌生活があった。（現存は百余首）京都ではすでに幼年期を回想した散文の時代もあった。散文を韻文にかえる苦闘は「ノート1924」につづられた。そして「詩人宣言」。詩人とは中原中也にとって三回転めの文章生活なのである。これらの経過が詩人になるための準備段階だと考えていては、いつまでたっても中原中也という人に出会えないかもしれない。でも、それはとても不思議なことだ。「書く」とは、もう一人の私を経営することなのだが、この少年はそれぞれにはっきりとした意志をもって文章上の私を経営していたのだから。

今年で生誕百年を迎える批評家小林秀雄にとって、確信めいた黄色い顔の高校生は宇宙人のように新奇だったろう。が、短歌投稿を創作歴とする年譜を見ればわかるとおり、五歳下の少年は、自分より五年も文学生活が早かったのである。だとしたら、謎はもっと深くて神秘的なもののようだ。十代の最初に湧きおこったらしい過剰な情熱のことを、私たちはどう語りあえばいいだろうか。こんなとき、敬愛する関川夏央はいつも上手に説明してくれる。

〈文芸家の人生はお手本にならない。結局はわがままな人々にすぎないから、おとなのたのしむ評伝となりにくいだろう。しかし、たとえば明治二、三〇年代という時代、身分制による消極的安定から放り出され、また近代資本制の成立期に長じて、人はなんのために生きるかという問いに当面した文芸家たちならどうだろうか。

その場合、主人公は文芸の内容でも文芸家自身でもなく、新しくかつ小さな産業としてのまた生活の方法としての文芸を成立させようと試みた若い集団の歴史である〉（「評伝もまた小説たらざるを得ない」）

彼は二葉亭四迷や漱石、そして白樺派の人々のことを言っている。そして、明治の末期に生まれたにもかかわらず、内心に「小さな産業」を宿した少年とは中也のことではなかったろうか。

上田敏いらいすでにフランス象徴派の詩は浸透していた。そして、われわれは萩原朔太郎や三好達治といった決して危なっかしくない手つきの完成した詩人を知っている。が、中也は違う。彼の詩は、詩が成り立つ困難そのままを再現している。彼の詩は、詩というものが立ち上がる瞬間に世の中と生じる亀裂や怖れを生傷のように残す。その意味では最初から完成し最後まで同じスタイルだった。彼にあったのはスタイルの困難ではなく、スタイルを持ってしまった人間が或る過渡期を生きねばならない困難だった。彼らしい表現で「實施の時代」と言う。わかっていたのだ、自分の役割を。詩を書くということが「芸」ではなく、鉄を打ったり港を浚渫することに等しい、高価な「労働」の時間が見えていた。言いかえれば、自国のもっている経済力と政治力の浮沈が言語の効力と深度を決定する。その危うさは震えるように血の濃度に直結し、「レウマチか壊血病かにかゝりさうな、それでゐて明るい血のヂャンルの中で最上壇にあるもの」と宣言させ、盟友富永太郎の「しとやかさ」に魅入られながらも、苛だちをあらわにした。一九三〇年代は、翻訳文化もトーキーも花ひらいた。そんな時代にあって、中也は「鄙」という名の過激なモダニズムを生きていたのである。

彼にもし不幸があったとしたら、あくまでも詩人として育んだ感性が、過渡期に於いてはなにより抜群の「批評」として存在してしまったことだったかもしれない。

昭和10年10月、草稿「撫でられた象」に次のようにある。

〈今や人々は作品の「姿」を見失つてゐる。／つまり、ドヤドヤと現れた西洋文學は、そのフォルムを迄了得する餘裕を我々に與へなかつたのである。云換れば、それらの西洋文學は、我々自身の現識或ひは我々の從来の文學で云つてゐたことの如何いふことに該當するか、その相關關係が十分に納得出来ないうちに、西洋文學の筆法だけを採用し、ともかく我々は筆を執つたのである〉

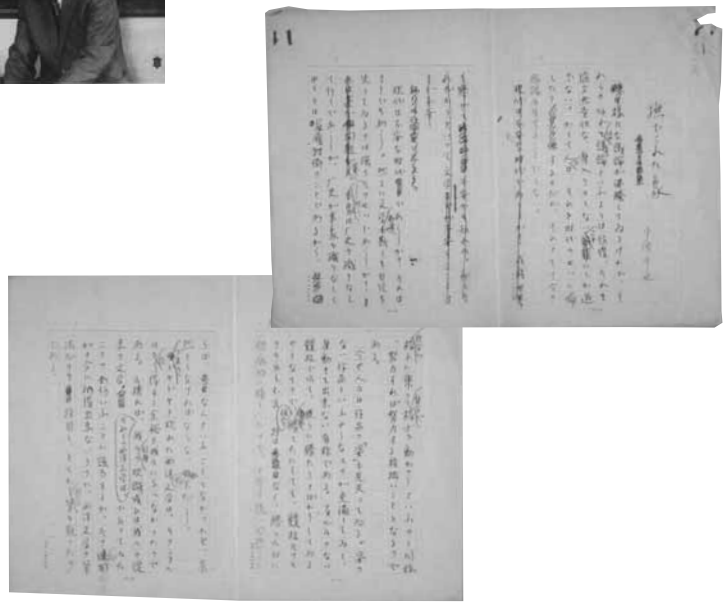
象の鼻を、あるいは手に触れてもいいのだったが、全体を知るには持続が必要なのだ。彼が「フォルム」を得るために問うていたのは、「筆法」を引き受けた人々の私生活の豊かさについてだったろう。

同年8月、小林秀雄もまた『私小説論』にこう記していた。

〈新しい思想を育てる地盤がなくても、人は新しい思想に酔う事は出来る。／作家達が見事な文学の伝統的技法のうちに、意識しているにせよしないにせよ、生きていた時、育つ地盤のない外来思想に作家等を動かす力はなかったのである〉

この年、既に湯川秀樹博士は中間子理論を発表する。関数式の群れが美しい詩脈の山をなしていた。中也の余命は二年。疎遠になりつつある二人が、いまだ明治の建白書のようにごつごつした文体で経営していたのは、言うまでもなく日本だった。

小林秀雄と母フク　昭和42年



草稿「撫でられた象」　中原美枝子氏蔵
（全14枚中1、5枚目）

山岡頼弘氏
一九五六年生まれ。山口県出身。文芸評論家。
「中原中也の『履歴』」で第42回群像新人賞受賞。
中原中也の会会員。

「中原中也を肉筆で読む」

――山口大学人文学部・二〇〇一年度夏期集中講義レポートより

平成13年8月6日から9日まで、記念館と山口大学人文学部は、相互協力により単位認定の夏期集中講義を開講しました。講師は詩人で『新編中原中也全集』編集委員でもある佐々木幹郎氏。人文学部生及び院生50名が受講しました。

授業タイトルは「中原中也を肉筆で読む」。オリジナル草稿のコピーを配布し、推敲過程をたどりながら、中也がどのように優れた作品に高めていったのかをたどっていきました。

ここでは、学生に科したレポートの中から佐々木氏が最優秀論文として選んだ三点を紹介します。

◎レポート(1)

人文学部言語文化学科
日本語文化論コース
3年 90番
山口 真友子

今回、四日間の集中講義を受けてみて、最も良かったのが、”中原中也“という作家自身の直筆草稿に直に触れられた事です。コピーであれ、実際にかかれた文字、生の字に触れる事など本当に貴重だと思いました。

文字は、その時の作者の時間や感情を少なからず感ずる、感じようとすることができる気がします。先生が、推敲によってその時間過程をさぐることができる、と言われた時、それがどんな事なのか、はっきりはわかりませんでした。実際に触れた時、その字の太さ、濃さ、筆圧そして流れとしての枠組み等が見えて来た気がしました。その時作者が何を重要視したかったのか、それがどう変わったのか、そしてその変化の裏付けとなる出来事・状況が存在したのか等、様々に想像することができました。パソコンやワープロで編集された作品の完成型を見ることで、作品世界を見る事と、草稿を見ることとは、読者としては質的な違いがある気がしました。読む事、最終的な完成作品をそのまま受け入れる事とその過程も含めて読むこと、ここに大きな差があるとははっきり言える気がしました。そして、それを大きく意味する先生の印象的な発言で、「作品は読者を介してこそ完成する。だからこそ、作品は一つに定まらない。」私はこの言葉に納得させられました。事実・真実を伝えるための読み物であれば、それは読者全てに等しく正しい事柄を伝える必要性があり、それが目的です。しかし、小説や詩等の文学作品においてそれは作者の作品世界において展開するのです。作者の世界に入ることこそが作品に触れることであり、理解になるのだと思います。そこで読者がどうとらえるか、それは様々であるはずです。一つの事柄を示そうとする意図では元々ないはずだからです。

先生が言われたもう一つの印象的な発言で、「詩で様々に解釈が成されるのは当たり前で、もしそれが一つの見方や読みが定まるのならそれは作品としてはそしい。」というような事を言われていました。私はこれもまた納得だと思いました。詩は小説等ともまた違い、小説は物語性・筋道・流れがあり、ある程度作品世界のみえるものだと思います。一方、詩においては思想や感情を半ばそのままというか、自然発生的な流れ、それは感情を沸々と表現するものだからと思います。極端に言うと、小説が作者の頭、知的世界に入り込むというのであれば、詩は心、精神世界に入り込むことではないかと思いました。

中也がその時どういう心情であったのか、何を思って、何故この言葉を選んだのか、添削したのか、私は草稿の推敲をみる度に、様々な興味・関心を魅かれました。

中也の草稿を見て、先生は「中也は言葉にこだわった、だからこそ何度も推敲を重ねたのだ」と言われました。授業時に取りあげられた「女よ」の推敲過程において”愛すか“”好きか“について推敲が成されていました。それは中也のこの二つの言葉へのこだわりであり、この状況・世界においては、どっちが好ましいか、どっちが自然であるか、作品として生きるのか考えたのだと思います。もちろん、どっちを選ぶか、大きな違いがあったからこそ、そういう過程が必要だったのだと思います。

私の中で、”愛す“と”好き“は大きな違いがあります。”愛す“は最愛の人と言われるように、極端に言うと失うと心の傷として一生残る位の深い存在、”好き“は友達であれ知人であれ気が合う仲間であれば、という感じで失って心は傷ついたとしても、それをいつか忘れてしまう、しまえるという位の存在なのではないかと思いました。”愛しい“”恋しい“という言葉は考えられないのか、私は考えましたが、”好き“や”愛す“は動詞であり動作・行動が主として表にあらわれていてその思いとしての強さも感じられます。”愛しい“や”恋しい“は形容詞であるためどこか思いや秘めたもの、裏の位置にあたり思いの強さが弱まるのではないか、ここではやはり適当ではないのかなと思いました。このように、推敲過程にあった言葉への中也のこだわりが、直筆草稿を見ることで、生で感じることができ、それによって、自分ではどうなのかなと、自然と考えてしまっていました。特に、この「女よ」という作品において の”好き“と”愛す“はこの講義に触れる以前から、私の興味深い事柄でした。どういう場合に用いるべきか、どういう場合が、その言葉の本来の意味をより効果的にあらわせるのか。しかし、ここで思ったのが、その言葉に適当な位置、使われ方はないのではないかということでした。特にそれが心情・気持ち・思いを込めた場合はとりわけそうであると思います。言葉の選択はその選択者の範ちゅうにおいてであるし、読者（理解者）は自身の中でその言葉を自身の解釈の世界に還元します。作者・読者それぞれが存在するのであるからその言葉の受け取り方が様々であってよいのではないかと思いました。詩の作品が読者を介して完成すると先生が言われた通り、それぞれであり、それぞれ成立して良いのだと思いました。あって当然なのであり、それぞれだから、その状態だからこそ作品は生きるのだと思いました。以上が、私が受講して、先生の講義を通して”詩“に対して”中也“に対して感じた事でした。

次に、課題である”中也の作品“中の一篇について取りあげます。私は次の作品に興味を魅かれたので、この作品について考えていきたいと思います。

骨

ホラホラ、これが僕の骨だ、
生きてゐた時の苦労にみちた
あのけがらはしい肉を破つて、
しらじらと雨に洗はれ、
ヌツクと出た、骨の尖。

それは光沢もない、
ただいたづらにしらじらと、
雨を吸収する、
風に吹かれる、
幾分空を反映する。

生きてゐた時に、
これが食堂の雑踏の中に、
坐つてゐたこともある、
みつばのおしたしを食つたこともある、
と思へばなんとも可笑(おか)しい。

ホラホラ、これが僕の骨――
見てゐるのは僕？ 可笑しなことだ。
霊魂はあとに残つて、
また骨の処にやつて来て、
見てゐるのかしら？

故郷(ふるさと)の小川のへりに、
半ばは枯れた草に立つて、
見てゐるのは、――僕？
恰度(ちやうど)立札ほどの高さに、
骨はしらじらととんがつてゐる。

実際に原稿用紙にかいたことで、私はこの作品における推敲がどのように成されていたのか、型だけですが、作者＝中也の立場と同じ空間を共有できたのではないかと勝手ながら思いました。行間に何と書き、何と訂正したのか、どういった試行が成されたのか、想像することが自然とでき、またおもしろかったです。そもそも、何故私はこの作品を選んだかというと、まず題である「骨」という言葉のインパクトからでした。私は、”骨“というと何か冷たい、たたくとカーンカーンと響くような、やはり暗いイメージをもっていました。”骨“というものをどう想像してこの作品をかいたのか、もしくは何かのモチーフがあり詩を作った後、その作品の題として用いたのか。この作品の意味するものとは何か。

私の解釈として、この作品は中也の人生をあらわしているような気がしました。最初は死が何であるか、悟った作品かなと思っていました。”生きてゐた時“という表現の使用等の点から、でも何度かよみかえす中で、それだけではないのではないかと感じました。中也は幼い頃から肉親の死等、死の存在を受け入れて来ました。弟の死等、そして息子・友人の死、中也にとって死の存在を早くから認識した事で、逆に死の存在をみつめる暇・余裕がなかったのではないかと思います。死がその人の存在を型として無にします。精神的なつながりをもってしては、それは意味を持つのか、”あのけがらはしい肉を破つて“はまさに自らの肉体的存在よりも精神的存在に重点をおいた表現ではないかと思います。ならば、”骨“は自身の精神の根本です。”故郷の小川のへり“は”故郷への思慕“である等、自らの精神世界、つまりは文学者としての文学上で自らの精神をかえりみた作品なのではないでしょうか。ただ、死に全く関係がないという訳ではありません。肉体を除けば、人間・動物・生物全てが”骨“なのです。その根本はかわることはありません。”風に吹かれる“”雨を吸収する“はあらゆる環境の違いによってその骨は型を変えていく、骨だけであっても型はかわるのです。そういった考えのもとに根源である骨を用い、自らの精神構造の分析をしたのではないかと思います。

一つ疑問に思ったのが、風や雨、小川など水に関する言葉が用いられている一方で、火に関する言葉が用いられていない気がしました。肉体を骨と引き離すための必要不可欠な”火“が用いられていません。そのまま”骨“となってはじめから存在したのには、まだ生きている中也の時間を意味しているのではないかと思いました。

擬態語が中也の作品中では多く用いられ、それが朗読状況を重視した中也だからこそだというのも納得だと思います。この作品においても”ホラホラ“と呼びかけたり、”ヌツクと“と用いられています。こういった表現が朗読を促しているように私は思いました。

私は「骨」という作品を半ば死を連想させる題によって、それを対照的にとらえた”生“を生きる自らととらえているのではないかと感じ解釈しました。

草稿「女よ」
（「ノート小年時」一頁）
中原美枝子氏蔵

「中原中也を肉筆で読む」

——山口大学人文学部・二〇〇一年度夏期集中講義レポートより

report

◎レポート(2)

人文学部人文社会学科
人間論コース
4年75番
橋本 法文

私は今回の講義を受けてから、初めて中也記念館へ行きました。するとそこには、授業で聞いた中也の足跡が示されていました。そしてそこにあった、中也の足跡を示している遺品、遺稿の数々は、その辿ってきた道を実感させるのに十分なものばかりでした。それらの品々の中で最も衝撃的だったのが、長男である文也の死んだ直後の写真でした。その写真を見ていると、四十九日の間一歩も外に出ず、ひたすら般若心経を読み続けた中也の悲しみや、やり場のない憤りのようなものが感じられました。もし自分が同じ境遇に立たされたらと考えると、心が痛みます。穏やかな死に顔が写真に写っていますが、その時中也が見たものは、写真と寸分違わぬその子の顔だったのでしょう。ものを写真として見る時には、人は無意識に静的なものだと了解していて、その写真から動的なものを連想します。しかし、中也が見たのは、生々しい現実に於いての静的なものであり、前提も了解もそこには存在していませんでした。中也は息子の死が本当に理解できていなかったのでしょう。写真のように動かない我が子を見て、頭の中にある論理の機能がうまく働かなくなったのではないでしょうか。無論、中也にしても、死を知らなかった訳ではないでしょう。親の死、旧友の死を見てきている筈です。しかし、我が子の死というものはそれらとは明確に区別されるべき相違点があります。それは愛情です。中也の日記からも分かるように、中也は、我が子のことに関しては全く能動的であったのです。そして、それは同時に、文也に関する全てのものとことが、文也本人も含めて、中也の一部となっていたということも指しています。中也にとっては、親や友の間には、文也との間にあるような、愛のような感情はありませんでした。つまり、親や友は中也にとって、究極的には他人にすぎない存在でした。このことが、文也の死と、他の人の死を大きく区別することのできる相違点であると私は考えています。いくら詩に書き起こしても、中也は文也の死を受け入れることは最後までなかったのではないかと思います。

以上に書いたのが、中也記念館で最も強く印象に残ったことです。関係ない話でしたが、これから先に中也の詩を少しづつ、何年もかけてゆっくり読もうとする上で貴重な体験をさせて頂いたということで書きました。

私が中也の詩の中で最も印象に残ったのは、『在りし日の歌』に収められている「月夜の浜辺」です。まだ全ての詩を読んでいないので、最もという言い方は適切でない気もしますが、詩という領域に於いては門外漢である私にとっては非常にわかりやすくて、考えさせられる所も多々ありました。内容は以下の通りです。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちてゐた。

それを拾つて、役立てようと
僕は思つたわけでもないが
なぜだかそれを捨てるに忍びず
僕はそれを、袂(たもと)に入れた。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちてゐた。

それを拾つて、役立てようと
僕は思つたわけでもないが
月に向つてそれは抛(ほう)れず
浪に向つてそれは抛れず
僕はそれを、袂に入れた。

月夜の晩に、拾つたボタンは
指先に沁(し)み、心に沁みた。

月夜の晩に、拾つたボタンは
どうしてそれが、捨てられようか？

私がこの詩が好きになった最大の要因は、分かりやすいという所です。いかんせんまだ詩というものに慣れていないため、様々な言葉から出てくる比喩、暗喩が即時に理解できないので、それだけにこの詩が持つ分かりやすさには心を引かれました。月夜に浜辺を散歩していると、波打際にボタンが一つ転がっていて、海にさらわれようとしては陸に打ち上げられていて、ボタンについた海水が月の光に照らし出されている。初めて見た時は分からずにそれに近よって、そしてボタンであることを知る。なんの気なしにそのボタンを拾って見てみると、やはり只のボタンだ。持って帰って服につけようという気は起きないが、かといってそれを投げ捨てるのも何か気がひける。持っていても実生活には何ら意味を為さない。それは分かっている。けれど、月の光に照らされたその神秘的な瞬間が頭からどうしても離れない。何か特別な力があるように感じられる。そんな特別なものを捨てられるわけがないじゃないか。

この詩を見て、上述のような光景が頭に浮かびました。いや、正確には、思い出されました、と言った方がよいでしょう。私もこれに似た経験をしたことがあります。今年の三月、一年留年するにも拘わらず、私の成績はひどいものでした。自分が何の為に大学へ来ていたのか、この四年間自分は何をしてきたのだろうか、と日々考えては自己嫌悪に陥る有様でした。同期の友人は殆どが卒業し、社会人への道へと向かっています。それに対して自分は、何か志がある訳でもないのに、もう一年居残ることになり、ひどく落ち込んでいました。そんな日のある夜、突然全てが嫌になって、車に飛び乗ってアクセルを思いっきり踏んで走りました。行く所があった訳ではなく、ひたすら走り続けました。そしてふと気がついたら、秋穂（あいお）まで来ていました。私の住んでいる湯田温泉から三十ほど離れた所にある秋穂に着いた時、私はどうやってここまできたのかを全く憶えてませんでした。何かに追われるようにして走ってきて、秋穂の砂浜まで来ました。我に返った私は、不意に外へ出て、砂の上に座ってずっと海を見ていました。それからしばらくして何となく海岸を歩いていると、波打際で何かが光ってました。近づいて拾ってみると、一〇〇円玉ぐらいの大きさの丸い鉄の板でした。よく道を歩いていてお金とかんちがいしてしまう、よくあるものです。別に一〇〇円が欲しくて取った訳ではないので捨てる気は起こりませんでしたが、その板を月に照らして見つめていました。しばらくすると光が鈍くなったので、また海水につけて光を見つめていました。そうこうしているうちに気持ちが落ちついてきて、今までの四年間を冷静にふり返ることができるようになりました。そうすると不思議なことに、無駄だったと思っていたことが確かな経験という形を持ってきました。以前、私の所属している宗教学研究室での授業で、キリスト教の予定説という考えについて習いました。結果論ではなく、人が自由意志に基づいて行動することの全ては神によって定められていたとする考えです。習った当時は何のことかさっぱり理解できませんでしたが、まさにこの時、その本当の意味に気付きました。全て定められているから努力しても無駄だというのではなく、人はその運命という名の神の必然を知ることはできないから、逆にその時々を一生懸命に生きなければならず、その結果として十分に報われなかったとしても、それは未だ時が満ちていないからであり、後になって、思わぬ形で具現化すると予定されていることであると私は気付きました。「人事を尽くして天命を待つ」と言う言葉は、このような意味のもとで語られる言葉であると思います。

以上のようなことを気付かせてくれた月と海と砂浜と鉄の板のことは今でも強烈に憶えています。この時の経験のおかげで、今は振り返らずに頑張ることができています。

背景こそ全く違いますが、中也のこの詩を見た時に、すぐにその記憶と結びつきました。邪推を許して頂けるならば、ひょっとしたら、中也も私が感じていたように、自分の行動について悩み、自己嫌悪していたのではないでしょうか。少なくとも、私が中也記念館で見た中原中也という人は、のれんに腕押しのような掴み所のないような人ではなく、暗く、深く、そして優しく思慮する人でした。本当に自分の思うがままに生きたような人ならば、こういった風な詩は書かないと思います。今の私にとっての中也の詩のイメージはオブラートで包まれた苦い薬のようです。苦く、つらい経験もしたけれど、それは自分にとって有用なものであり、しかしそれを他の人に伝えるには柔らげないといけない。そういった過程で詩が作り上げられたような気がします。

最後に、この詩の重要な言葉である「月」は、中也にとって、ある種宗教的な意味合いを持つものではないかと私は思います。宗教学者であるルドルフ・オットーは、その著書である『聖なるもの』について、聖なるものは両義的意味を持ち、人を魅了するものだとしています。中原中也にとっての月は、まさに聖なるものだったのではないかと私は思います。他の詩の中で、中也は、ある時は月をきれいなもの、神聖なものとして扱っていますが、例えば「月の光」などでは、死に関わるものとして描いています。これらのことから、中也にとっての月は、様々な意味を持つ「聖なるもの」だったのではないかと私は推測します。もしよかったらルドルフ・オットーの『聖なるもの』を読んでみて下さい。

詩について考える機会を与えてくださったことに感謝します。

中也と文也　昭和10年

「中原中也を肉筆で読む」

――山口大学人文学部・二〇〇一年度夏期集中講義レポートより

◎レポート(3)

人文学部言語文化学科
日本語文化論コース
3年50番
辻 佳久沙

正直に言って、一篇の詩について四千字述べるのは至難の業である。もともと中也に関する知識の少なかった（実際「汚れつちまつた悲しみに……」と「サーカス」しか知らなかったのである）私にとって、講義していただいた四日間に学んだこととその後の自学で学んだことだけをもとにして一篇の詩に凝縮させるのは難しい。思うに、専門家でも長年考えをめぐらせたうえでなければたった一つの詩で中原中也論を論じるのは至難の業ではないだろうか（そんな一朝一夕で真髄の見抜ける詩など三流ではと思われるが）。やはり中原中也の詩は一筋縄ではいかない「本物」である。そのため短い時間で考えをめぐらせた結果出てきた、中也の詩に対する私の思いは少し表面的な話になりかねない。

中也の詩は、授業でも再三触れてきたように声に出して諳んじてみたときにその魅力がよりはっきりと現れてくる。それは中也の詩に不安定なようで安定感のある独特のリズムが存在するからであり、韻を踏んでみたり度重なる推敲によって語調を整えたりしているからである。形式的にも四・四・三・三などの種々の区切りを用いるソネット形式を中也は愛用している。そんな彼の詩をわれわれ現代人が読んだとき、七十年も八十年も前の作品と思えない人も少なくないのではないだろうか。彼のうたはどこか馴染み深い印象を与える。いったいそれは何に起因しているのだろうか。

駆け出したはいいが
靴音が跳ね返り突き刺さる
月曜の太陽に静寂が燃えて姦しい

花には風が
風には雲が
揶揄うように戯れる

誰か私を知らないか？
誰か私を知らないか！

六月のささやきが
狂おしい午後には
屋根には雨が
時計の音が
震えて饐えて
血を吐く様だ

誰か私を知らないか？
誰か私を知らないか！

（この静けさに耐えかねて嗚咽を
漏らしているのは誰だ！）

哀れ明日知らずの灰色の魂よ

（「静寂が燃える」作詞　吉野壽）

これは現代に生きるある詩人（詩を書く人、と言う意味でとりあえずそう表現しておく）の書いた詩である。彼が書く詩と中原中也の書く詩に何か似たものを感じるのは私だけだろうか。似ている、と感じる点はいくつかある。まず一つ目に魂の叫びをリズミカルに歌い上げているという点、二つ目にソネット的な形式上の類似、三つ目にその語り口、そして「私」を客観化しているという点で中也の「骨」のスタンスと重なる。しかし私は単純に彼の作品は中也の影響を直接うけているなどということを言いたいのではない。むしろ彼はまったく意識してないかもしれない。それでも同じような手触りをこの二つの作品が持ち得た、という事実を受けて、中也の遺した作品が後世に与えた影響について考えたいのである。

当然ながらこれほどの詩人ならば後世の詩人にとってはひとつの規範として大いに影響を与えているであろう。しかしそれは中也に限ったことではなく、萩原朔太郎にしても宮沢賢治にしても草野心平にしても現代ではひとつの型として機能している。詩人が詩人に影響を及ぼすのはあたりまえである。だが中原中也の場合、詩人だけでなく違ったジャンルにまで影響を及ぼしているように感じられるのである。

ここで正体を明かしてしまえば、先ほどの「静寂が燃える」という詩はある歌（売ることだけを目的とするポップミュージックとは異なる、作り手側が己の魂とのせめぎあいを表現し伝えるべくして生み出される音楽、新しい意味での「ロック」）の歌詞である。少し補足的に述べておくが、現在「ロック」という言葉が指す音楽は昭和期にカテゴライズされていたようなギャンギャンうるさいだけの音楽ではなく、先ほど述べたような意味を担った音楽に移行している。落ちぶれて学歴を失っても自分と向き合い己の魂と格闘する中也の姿は現代「ロック」の姿勢と比べてなんら遜色ない。今から七十年も八十年も前の時勢の中で詩人という芸術創作者がそういった環境（順風満帆でない、逆風の多い状況）にあって芸術活動を行っていたことはそれ自体大きな宝であり（中也自身は苦悩に満ちていたかもしれないが）、そういう先人としての中也の存在は過去に詩から歌謡曲が生まれていった「現代的歌のはじまり」に当然影響を及ぼしたであろう。中也の詩風と彼自身の姿勢は「うた」の源泉となってはいないだろうか。

前述したような「静寂が燃える」の詩と中也の詩とのリンクは、「静寂が燃える」に限ったものではなく、列挙した「似ている点」は数多くの現代音楽の歌詞にも見られる要素である。今でこそしばしば見かける、詩の中で客観的に自分を見つめる方法は、七十年前にさかのぼると「骨」の中で中也がやってのけていたりする。さまざまな点が中也によって「やってのけられている」のである。なぜほかでもない中原中也がこのように現代音楽、特に現代ロックと強く結びついているのだろう。私はそれは視点の問題ではないかと考える。中也は文学にのめり込むがゆえに、一九二三年県立山口中学を落第し京都立命館中学に転校することとなる。彼はそのことを悲嘆にくれる両親をよそに「飛び立つ思ひなり」といい、志も新たにいっそう文学の世界に飛び込まんとしている。そしてその後は上京して詩作の世界に没頭しその生活ぶりはあまり褒められたものではない。それでも彼は自分の行いは正しいと考えて揺るがない。こういった人生の流れ・姿勢は実は音楽で大きくなろう、ロックで自分の思いを表現しようとするロック少年のそれと変わらないのである。

実際「静寂が燃える」の作者も音楽をやりたいがために高校のランクを落として進学、八カ月で退学し、都会に出てゆき、最終的に上京しその後はただひたすら音楽にのめりこむという人生を送っている。彼も中也と同じように自分と自分の音楽は正しいと信じ世に認められない時期を耐えていたのである。中也の視点はいわゆる「不良少年」のそれであった。身一つで挑む夢を持った不良少年の強さ、せつなさ、弱さ、美しさ。そういった部分でほかでもない中原中也が現代ロック音楽と強く結びついているのである。

中也の詩が実にリズミカルで形式的にも歌に近いことはそのいくつかが実際に歌として採用されていることに十分現れているだろう。また中也の詩に子守唄的要素が見られるのも形式的に歌に近いものを持っていることの現われのひとつである。外郭から内容の細部に至るまで中也の詩と現代に存在する音楽の重なる部分は教え上げればきりがないが、それはそれだけ中也の詩がひとつの型、規範として純文学の詩の方面だけでなく、少し異なるジャンルにまで影響を及ぼしているゆえに他ならない。

ところで、あらゆる音楽についてそのルーツが認められる、と聞いて何か思い出すものはないだろうか。しつこく音楽と絡めて少々気もひけてくるが私はこの性質に思わずビートルズを連想させられたのである。周知のとおりビートルズの作り出した音楽はロックに止まらずあらゆるジャンルの音楽の原型となった。日本においてもその影響は甚大で、今となっては日本の音楽でもメロディにおいてはビートルズの「型」を踏襲している。しかしここで留意してほしいのはあくまでメロディが、という点である。当然のことながら日本の音楽である以上付く歌詞の大半は日本語であり、ビートルズの影響など受けにくい。それでもそこに存在する一定の「型」は中原中也（もちろん中也だけではないが、その類似性から代表的な扱いをする）らが戦前昭和の詩群として生み出した、大正以前とはまた少し趣の異なる詩から発生しているように思われる。この時期に中也や立原道造がソネット形式を愛用していることも一役買っている（ソネット形式に見られる独特の区切りは現代の歌詞の書き方と非常に酷似している）。現代日本音楽の祖はメロディはビートルズ、歌詞は中也含め周辺の詩人。中也の及ぼした影響からこのようなことも言えるのではないだろうか。

以上のことから中原中也の詩はわれわれ現代人にとって七十年、八十年という歳月を感じさせないほど心地よく親しみ深いものである。冒頭で中也について知識に乏しかった、と述べたが、実はそれは中也の詩が以前は少し甘えに感じられあまりいいとは思っていなかったためであった。しかしそこに秘められた中也の心の叫び、喜びは人間が常に心に抱くものであり、それから目をそらさずにありのまま語っているところに中也の素晴らしさがあるということが今回の講義およびその後の学習で発見したことである。音楽に不朽の名盤があるように、中也の詩はおそらくこれからもずっと愛されていくであろう。「山口に住んでいるならばもっと機会を利用して中也のことを知るべき」という佐々木氏の言葉に今となってまったく同感である。一筋縄ではいかない「本物」の詩人の姿をわれわれ山口市民は見つめていかなければならない。

講義中の佐々木幹郎氏

1937年、30歳で夭折した中原中也―

没後60余年を経た今日、
その詩はさらに輝き、愛誦されつづける。
角川版旧全集を全面改訂、
30年ぶりの本格的・新編「定本」全集!

新編
中原中也全集

全5巻＋別巻1

【編集委員】
大岡昇平・中村稔・吉田凞生・
宇佐美斉・佐々木幹郎

各巻、前例のない画期的二分冊構成
◆「本文篇」＝厳密な校訂による新本文の確定
◆「解題篇」＝各作品の成立・推敲過程を詳述

第1巻　詩Ⅰ
＊（第1回配本）新発見詩篇2
第2巻　詩Ⅱ
＊（第3回配本）新発見詩篇2
第3巻　翻訳
＊（第2回配本）新発見散文3
第4巻　評論・小説
（第5回配本）新発見草稿4
第5巻　日記・書簡
（第4回配本）新発見「療養日誌」・新書簡31
別巻　（上）写真・図版篇
（下）資料・研究篇
（第6回配本）初公開資料多数

＊印既刊

造本
四六版・並製・カバー装・美装貼函入
各巻［本文篇］［解題篇］二分冊（分売不可）
予価　本体7,000円～8,500円（税別）

2000年3月より刊行開始
第1巻・第2巻・第3巻　発売中

角川書店
〒102－8177　東京都千代田区富士見2－13－3
TEL03－3238－8521　FAX03－3262－7734

中也と心平の青春交友

いわき市立草野心平記念文学館
◎学芸員　長谷川由美

いわき市立草野心平記念文学館は、草野心平が生まれ育ったふるさとを見渡せる高台に建っています。常設展示室では、明治36年から昭和63年までの八十五年間の心平の生涯と作品を紹介しています。平成10年の開館以来、春は所蔵品展、夏は草野心平と交流のあった文学者、秋は地元いわきに関係する企画展を開催してきました。平成13年夏は、中原中也展を行いました。中原中也記念館の福田百合子館長をお迎えしテープカットをした初日の7月7日から、8月26日の最終日までに、二一四二二名のお客様が、中也と心平に会いに来てくださいました。

中原中也展オープニング
テープカットをして、企画展を祝う関係者
左　草野心平記念文学館　館長　粟津則雄氏

中原中也展の監修は、詩人で、『新編中原中也全集』編集委員の佐々木幹郎氏にお願いし、ご指導をいただきました。展示資料は、中原美枝子氏と中原中也記念館のご協力をいただきました。

展示は、〈中也の生涯と作品〉と〈中也と心平の青春交友〉の二つのテーマで構成しました。

〈中也の生涯と作品〉では、第一詩集『山羊の歌』刊行の際、高村光太郎に題字を書いてもらうことを希望した中也が、装幀を依頼するため、心平と二人で光太郎を訪ねたことや、展示初公開となった、俚謡「（丘の上サあがつて、丘の上サあがつて）」が書かれた中也の「療養日誌」を紹介しました。

〈中也と心平の青春交友〉では、《花売論争》《「歴程」をめぐって》《中也の詩・心平の詩》に分け、中也と心平が出会った昭和9年11月から中也が亡くなる昭和12年10月までの、三年に満たずとも、後々まで心平に深い印象を残した、二人の交友を紹介しました。《花売論争》では、中也・心平と太宰治・檀一雄が二組に分かれて喧嘩をしたという、「青春交友」と呼ぶにふさわしいエピソードを紹介しました。《「歴程」をめぐって》では、昭和10年5月に創刊された詩誌「歴程」に参加した中也が、昭和11年11月の通巻五号までに発表した作品の掲載頁を開いて展示しました。心平が「歴程」での中也追悼特集が組まれた通巻六号に寄せた詩「空間」の心平自筆による書もここで展示しました。《中也の詩・心平の詩》では、同時代に書かれた二人の詩に共通するモチーフでその対照が顕著な、蛙、月、子供、雪などを取り上げ、二人の詩を対比し、詩心の違いを、来館者に感じてもらいました。また、ここでは、昭和49年に、心平がレコード『中原中也の世界』で「私の記憶のなかの中原調と私の自己流をプラスした」よみ方をしたという中也の詩「サーカス」「正午」「冬の長門峡」の朗読を流しました。

また、会期中、中也への手紙を募集しました。世を去った詩人へ、というよりは、自分たちと同じ時間を生きている中也への思いを綴った文章がほとんどでした。中也追悼号となった昭和12年の「文学界」十二月号に、心平が寄せた「中原中也」は、こう締めくくられています。

五十年後あたりの若い詩人たちは昭和の一つのかなしいエレジーを読むことだろう。

心平のこの言葉が虚飾ではなく、現在既に証明されていると感じた中原中也展でした。

草野心平書「空間」

【特別展】書簡にみる交流の足跡

平成13年8月1日（水）～8月26日（日）を会期として、特別展「書簡にみる交流の足跡」を開催いたしました。

この特別展は中也の友人である安原喜弘と中也との交流を、平成11年に安原家から記念館に寄託された安原宛中也書簡や詩稿を中心に構成・紹介したものです。未発表であった長篇「羊の歌（『山羊の歌』所収）」をはじめ、安原が学生時代に書いた「演劇舞台装置スケッチ」など、展示資料については安原家から全面的な協力をいただきました。安原と中也との交流を紹介したこの特別展は平成12年度に続いて二回目の開催となります。

初日は安原喜弘のご子息・喜秀氏と中原家ご遺族・中原美枝子氏をお招きし、佐内正治山口市長、井上洋山口市教育長、福田百合子館長の五名によるテープカットではじまりました。

安原喜弘（一九〇八～一九九二）と中也が大岡昇平を介して出会ったのは、昭和3年秋。安原宅で、ベートーヴェンの第九シンフォニーのレコードを大岡昇平と三人で聴いたのが最初でした。

当時、成城高等学校文科乙類に在学していた安原は、京都帝国大学へ進学。学校誌「遊歩場」に詩「想出島之春」「伊豆大島」を、「遊歩場週報」にエッセイなどを掲載し、編集も手がける文学青年のひとりでした。昭和7年には玉川学園出版部より『セザンヌ』を刊行。中也と共に同人に加わった「白痴群」や「紀元」にも自作の詩を発表しています。

一方で演劇活動にも積極的に参加し、芸術的素養を発揮しています。昭和3年には成城高等学校演劇部の仲間と劇団「Neue Gruppe（ノイエ・グルペ）」を結成。劇団員には、中也の友人富永太郎の弟次郎もいました。安原は俳優として出演するとともに、舞台装置などを担当。大正15年頃使用していた舞台装置を描いた「画帳」が現存しています。活動は京都帝国大学卒業後の昭和7～9年頃まで続き、親友山口進や富永次郎、加藤英倫らと菊池寛や武者小路実篤原作の演劇に出演しています。

一六八　の長身であった安原と一五〇　の小柄でズダ袋の様な上着を着、黒のお釜帽子をかぶった中也は、京都や東京の街を連日連夜彷徨していたといいます。「いつも最初は人に会いに行くのであった。三度に二度は断われた。（中略）疲れると酒場に腰をすえるのである。」（安原喜弘「中原中也の手紙」）

酔うと気が短くなり、構わず憤激衝突していた中也との約九年間にわたる交流の中で、「無用の摩擦」を起こさぬようにと心掛け、常に「生活圏との通訳」をしていた安原に送られた手紙は、現存するもので約百通余り。時に詩稿も添えられていました。その中の一つで、中也が東京外国語学校の入学試験準備に取りかかる直前に贈った詩「羊の歌」には、「安原喜弘に」との献辞が付されています。

昭和7年4月、中也は第一詩集『山羊の歌』刊行に着手します。本文の印刷はできたものの、製本・装幀の金銭工面ができず、印刷を終えると「下宿では置いとく場所もないから預かってくれ」（安原喜弘「中原中也のこと」「中原中也の手紙」）との依頼により、刊行までの約二年間、安原は本文と紙型を預かりました。昭和51年当時、安原は「詩集『山羊の歌』の編集から印刷まで、一連の作業の行われたのが、代々木の低地の古い二階家の、陽のあたる二つ（三つ）の小部屋であったことに、私はなぜかいい知れぬ感慨を覚えるのである。」（安原喜弘「中原中也のこと」「中原中也の手紙」）と回想しています。

昭和11年11月10日、長男文也の突然の死が訪れます。中也の精神的ショックは計り知れず、神経衰弱が高じ始めます。昭和12年1月千葉市の中村古峡療養所に入院し、2月には退院するものの、文也との思い出が詰まった場所から離れたいとの意向により、鎌倉寿福寺境内に転居。しかし、同年10月結核性脳膜炎を発病し、鎌倉の養生院に入院。安原と最後に会ったことを、中也は最後に使用した「ボン・マルシェ日記」昭和12年10月2日の項に、「安さん訪問　と記しています。

昭和12年10月22日に中也は没します。葬儀は鎌倉寿福寺で行われました。安原は中也の告別式に参列し、会葬者名簿にも名を残しています。

中也没後、中也を広く理解してもらうためにと私信の発表を決意した安原は、『中原中也の手紙』（書肆ユリイカ　昭和25年刊）を発刊しました。

昭和37年頃には、中也の墓参りに山口を訪れています。

安原喜弘と中也の母フク
昭和37年頃、
中也の眠る中原家のお墓の前で

中原中也研究 第6号

発売中

【エッセイ】
天沢退二郎
中也・ヴィヨン・賢治
佐伯研一
「胡桃の会」と署名帖について
【特集】
昭和初年代の詩的青春
【講演】
三浦雅士
〈青春〉の大衆化と終焉
【シンポジウム】
・昭和初年代の詩的青春と中原中也
【小特集】
安原喜弘「晩年の手記」（1983―88）
定価　2,000円（税込）

次号のお知らせ
中原中也研究　第7号
特集　「新編中原中也全集」の発刊をめぐって
平成14年8月31日発行

問い合わせ◎中原中也記念館
電話　083―932―6430
ファックス　083―932―6431

歌人・友廣保一

～小企画展「山口の歌人・友廣保一」より～

平成13年1月30日から3月24日まで開催した小企画展では、「山口の歌人・友廣保一」と題し、山口歌壇を代表する歌人であり、中也も頻繁に訪れた古書店「第三書房」を経営していた友廣保一について紹介しました。

友廣保一（一九〇四～一九九三）は長く山口歌壇で活躍した歌人です。山口県熊毛郡室積村（現・光市室積）に生まれた友廣は、小学六年生の時に教生の影響を受け短歌を始めます。昭和2年から「アララギ」に入会し中村憲吉、斎藤茂吉、土屋文明らの直弟子として六十余年に渡り短歌活動を続けていました。

16～18歳頃の友廣保一

大正11年以降、広島、松山の書店で働きながら、当時山口で発刊され中也も投稿していた「白梅」（大正11年7月～同14年3月推定）や「あけぼの」（大正15年8月～昭和4年4月）に短歌を投稿し始めます。この頃の山口周辺では、数多くの短歌雑誌が発刊されていました。昭和5年10月、山口に帰郷した友廣は、「水可美」（昭和8年2月～同15年9月）を主宰し、「なぎ」（昭和31年1月～同40年12月）の編集兼発行を引き受けています。また友廣は、「詩園」（昭和13年9月～同18年8月）、「山口県文学」（昭和19年10月～同20年10月）などに短歌や批評文を寄せたりと意欲的な活動をしていました。

一方で友廣は、古書店の主人という顔も持っています。中也は東京から帰省した時には、黒い吊り鐘マントをはおり下駄を履いて、友廣が経営をしていた「第三書房」によく訪れていました。

第三書房店内

第三書房は、昭和5年に山口市札ノ辻に開業し、昭和14年には同市米屋町に移転しています。主に学術書や文学関係の書籍を中心に販売していました。友廣は、中原家に父謙助の蔵書と思われる医学書を買いに行ったこともあるようです。

五十余年にわたって学生から一般の人まで広く親しまれていた第三書房は、「山口の文化の灯がまたひとつ消えていく」と多くの人達に惜しまれながら昭和59年7月3日に閉店しました。友廣は当時中国新聞の取材で「これからは学生との楽しかった触れ合いを思い出しながら、短歌作りに余生をささげたい」（昭和59年6月27日号）と語っています。

友廣は、昭和63年に昭和2年から同55年までの作品が収録された第一歌集『流るる音』を、平成2年には昭和56年から平成2年までの作品が収録された『〈続〉流るる音』をそれぞれ刊行しました。

【新・資・料】

高田博厚制作「古在由直ブロンズ像」

古在由直　ブロンズ像

「古在由直ブロンズ像」は、高田博厚（一九〇〇～一九八七）が中也と知り合う直前の昭和2年に制作したものです。高田は、中也をはじめ、高村光太郎など多数の有識者のブロンズ像（現存一七五点）を制作していますが、これは現存する高田の渡仏前の数少ない作品のひとつです。寸法は一九〇×一五〇×一六五（mm）。

古在由直（一八六四～一九三四）は、京都出身の農芸化学者で、東京大学農科大学の助教授となった後ドイツに留学。足尾鉱山の鉱毒の精密な分析を行い、被害農民の正当性を立証しました。その後、同大学教授を経て、東大総長に就任しています。

高田博厚は、明治33年8月19日、現在の石川県七尾市に生まれた彫刻家です。幼少期から青年期までの多感な十六年間を福井市で過ごし、大正7年福井中学校を卒業すると美術をめざして上京、十六歳年上の高村光太郎に出会います。高村との出逢いは高田に彫刻への道を啓示しました。

昭和4年7月、高田は古谷綱武を通じて中也を知ります。当時中也は高田のアトリエの近く、高井戸町中高井戸三七に住んでおり、古谷、小林秀雄、大岡昇平らと、毎日のように高田のアトリエを訪れていたといいます。高田は中也の詩に大変感心し、雑誌「生活者」への発表を促しています。中也の詩のアンソロジーが掲載されている「生活者」昭和4年9月号には、掲載箇所の末尾に高田の付記があります。高田は昭和5年に「中原中也像」を制作しますが、その像は紛失し、昭和33年に改めて像を制作しています。

当時ヨーロッパ知性の最高峰といわれたロマン・ロラン（一八六六～一九四四）の思想は、高田の心を魅了し、いつしかフランスへの憧憬が広がっていきます。昭和6年に高田は渡仏。「君は指で思索するのだな」とつぶやいたロランを師と仰ぎ、多くの知識人達と交流し、日々創作の思索と修練を積んでいきました。

第二次世界大戦の動乱も乗り越え、二十六年もの長い間フランスで暮らしていた高田は、昭和32年に在仏中に制作した作品をすべて壊して単身帰国。帰国後間もなくして東京西落合にアトリエを借りて、彫刻制作を再開します。「仕事をすること」が「生きる」ことであった高田は、晩年になってもなお毎日のデッサンを欠かすことはなかったといいます。

社会的名誉を求めることなく、ひたすら鎌倉稲村ガ崎のアトリエで制作活動を続けていた高田の生涯は昭和62年6月17日、静かに幕を閉じました。

高田博厚

主なできごと ◎平成13年度　記念館行事記録◎

2001年4月―2002年3月

4月28日	第6回中原中也賞贈呈式及び記念企画 （於　ホテルニュータナカ2階平安の間） 受賞詩集『釣り上げては』　アーサー・ビナード 記念企画「中也の長州～方言による朗読」 出演:小口ゆい　藤田三保子　　解説:佐々木幹郎
	第5回中原中也賞英訳本詩集贈呈 『いまにもうるおっていく陣地』蜂飼耳
29日	中原中也記念館運営協議会 中原中也生誕祭「空の下の朗読会」 （於　中原中也記念館前庭） 出演:谷川俊太郎　DiVa　他

生誕祭
谷川俊太郎氏（写真右）とDiVa

5月30日	小企画展「中也幻想」（～7月29日）
6月 9日	中原中也の会第5回研究集会（於　東京・日本近代文学館） シンポジウム 「中原中也とランボー・ヴェルレーヌ ～『新編中原中也全集』第3巻をうけて」 パネリスト:宇佐美斉　鈴村和成　山田兼士 司会:佐々木幹郎
7月21日	公開講座（於 山口市湯田温泉・サンフレッシュ山口） 「故郷という異郷」山岡輝弘（文芸評論家）
27日	特別展に先立ち、詩稿「羊の歌」を報道陣に初公開。
8月 1日	特別展 「書簡にみる交流の足跡」（～8月26日）
4日	公開講座 「白秋・朔太郎・中也」 國生雅子（筑紫女学園大学文学部助教授）
6日	山口大学夏期集中講義 「中原中也を肉筆で読む」佐々木幹郎氏 （～9日　山口大学大学会館2階）
25日	公開講座 「オレンジ色の夢―挫折の果てに詩人は何を夢見たのか―」 福島泰樹（歌人・評論家・絶叫ミュージシャン）
29日	小企画展「四季同人による中也詩評」（～10月28日）
31日	「中原中也研究」第6号発行
9月 8日	中原中也の会理事会（於　ニューメディアプラザ山口） 中原中也の会第6回大会 ●シンポジウム 「中原中也・いのちの声 ―『新編中原中也全集』第1巻・第2巻をうけて―」 パネリスト:佐々木幹郎　傅馬義澄　中原豊　司会:陶原葵 ●アトラクション 「詩人による中也詩の朗読」 北川透　佐々木幹郎　中村稔　宇佐美斉　福島泰樹
	●講演 「昔読んだ中也、今会う中也」 三木卓（詩人・作家）
9日	中原中也の会第2回セミナー・文学散歩 「門司・下関と中原中也」 旧英国領事館（下関市）～門司港レトロ（北九州市）
10月22日	中也命日・墓参り
31日	企画展 「秋の悲歎・富永太郎 ―私は私自身を救助しよう。」（～11月25日） 監修:宇佐美斉　佐々木幹郎
11月16日	全国文学館協議会・総務情報部会 （於　山口市湯田温泉・ホテル喜良久）
17日	中原中也記念館運営協議会
28日	中原中也記念館展示検討委員会 小企画展 「吉田正写真展　imagination ―中也―」（～1月27日）

小企画展
「吉田正写真展
imagination-中也-」

2002年	
1月26日	中原中也の会理事会（於　東京・山の上ホテル）
30日	小企画展「山口の歌人・友廣保一」（～3月24日）
2月16日	第4回中原中也賞受賞者・和合亮一氏による小学校6年生を対象にした詩作の特別授業（於　山口市立湯田小学校）

和合亮一氏
特別授業風景

18日	開館8周年
23日	第7回中原中也賞選考会（於　山口市湯田温泉・西村屋） 日和聡子氏の詩集『びるま』（私家版）が選ばれる。
3月10日	詩のボクシング山口大会予選会 （於　ニューメディアプラザ山口）
27日	小企画展「第7回中原中也賞」 （～5月26日）
31日	「中原中也記念館館報」第7号発行

第7回中原中也賞

『びるま』日和聡子さん

Chuya Nakahara prize

第7回中原中也賞の選考会が、平成14年2月23日に、中也が結婚式をあげた山口市湯田温泉の西村屋旅館「葵の間」で開かれました。一八七詩集（応募一八〇詩集　推薦七詩集）の中から、最終選考に残った七詩集で協議がなされ、選考の結果、東京都豊島区の大学職員・日和聡子さんの詩集『びるま』（私家版）が選ばれました。

選考委員を代表して中村稔氏は「びっくり箱を開けたような意表をつくイメージの展開があり、とにかく楽しい。難解な泥沼に入り込んだ現代詩の中で全然違う切り口から新しい詩の世界を切り開いている」と評価されました。

日和さんは「小学生のころテレビで中也の詩を知って以来のファン。賞をきっかけにさらに詩作に励み、将来へつなげたい」と受賞の喜びを語りました。

第8回中原中也賞

作品募集

【対象】
平成13年12月1日から平成14年11月30日までに刊行された現代詩の詩集（奥付の刊行年月日による）。

【正賞】
受賞詩集を英訳本として出版

【副賞】
100万円

【選考委員】
荒川洋治
北川透
佐々木幹郎
佐藤泰正
中村稔
〈五十音順〉

【応募方法】
著者本人が、同じ詩集を三部送付してください。なお、「中原中也賞応募」と明記の上、本名、郵便番号、住所、電話番号を記入したものを添付してください。

◎送付先
〒753−0056
山口市湯田温泉一丁目11−21
中原中也記念館気付「中原中也賞事務局」 行

【発表】
平成15年（2003年）2月の選考会終了後、報道機関を通じて発表します。

◎ 平成14年度 記念館行事予定 ◎

2002年4月—2003年3月

4月 7日	詩のボクシング山口大会本大会（於　ぱ・る・るプラザ山口）
29日	中原中也生誕祭「空の下の朗読会」（於　中原中也記念館前庭）出演:小室等　伊藤多喜雄　他
5月29日	小企画展（〜7月28日）
6月 8日	中原中也の会第6回研究集会（於　日本近代文学館）
8月 31日	特別展（7月31日〜終了日未定）「中原中也研究」第7号発行
9月 7日	中原中也の会第7回大会（於　山口市）
8日	第3回セミナー（於　山口市）
10月22日	中也命日・墓参り
30日	企画展（〜11月24日）
11月27日	小企画展（〜平成15年1月26日）
2003年	
1月29日	小企画展（〜3月28日）
2月18日	開館9周年

中原中也記念館 館報【第7号】平成14年3月31日
発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@ymg.urban.ne.jp

表紙写真｜翻訳詩集『ランボオ詩集』